

# 豊かな歴史と文化と自然を次代へ伝えるまちの再生

岩手県大槌町町方地区・土地区画整理事業・津波復興拠点整備事業・防災集団移転促進事業 (2012年◆平成24年から実施中)



「末広町まちびらき式」と垂れ幕を張ったテントのなかに、にぎやかな祭囃子が響き渡る。男衆の力強い太鼓や掛け声、軽やかな笛の音に合わせ、威勢よく舞い踊る2匹の獅子。続けて虎の着ぐるみをもとった勇壮な虎舞が披露されると、子供の手を引き前列へ駆け寄る人、手拍子を取る人も現れ、テントの中は祭りのような華やぎに包まれた。

## 中心市街地でまちびらき

岩手県沿岸部にある岩手県大槌町。太平洋に面した大槌湾には、NHKの人形劇『ひよっこりひょうたん島』(原作・井上ひさし)のモデルとなった蓬萊島が浮かび、豊かな湧水が町を潤し、鮭の遡上する大槌川、小槌川が流れる。山側に目を向ければ、北上山地に連なる山々がそびえ、14世紀に築かれた大槌城跡が町を見守る。3月11日の大津波は、その豊かな自然と人々の暮らしを飲み込み、800名以上もの尊い命を奪い、4000棟を超す多くの家屋を破壊した。

それから5年たった3月12日。町の中心部である町方地区の末広

町で、冒頭のまちびらき式が開かれた。工事関係者や町民など120名以上が見守るなか、平野公三町長が「いよいよ中心市街地としての新たなまちづくりがスタートします。大槌型コミュニティによる、一人ひとりに寄り添った心の復興、まちづくりを進めていきたい」とあいさつを行った。

続いて、町方地区の土地区画整理事業と町内8地区の災害公営住宅建設など、大槌町の復興まちづくりを全面的にサポートするUR都市機構復興支援統括役の渡部英二が「およそ2年半の盛り土工事を経て、大槌町に4ヘクタールの土地をお返しし、6階建ての災害公営住宅をお引渡しできることとなりました。新たに町方地区にお住まいになる皆様が希望に満ちた新生活を送られますように」と祝辞。旧町名である「松の下」にちなんだ松の植樹や餅まきも行われ、新しい市街地に住民の歓声と笑顔があふれた。

## 伝統と人の和に配慮した住まい

同日お披露目されたのは、町方地区の一部にある宅地107区画



と、4月に入居が始まる鉄筋コンクリート造りの災害公営住宅(53戸)だ。URが建設した災害公営住宅は、地域の伝統的な住まいの雰囲気を残し、地元産材を使った雁木や瓦屋根を配したデザイン。住む人が気軽に立ち話をしたり、集まったりできるように、1階の外通路は広めに取り、腰かけておしゃべりができるベンチを設置。多目的に使える「みんなの広場」やお茶っこや健康体操などができる集会所を設けたり、伝統行事であるお盆の送り火、「松明かし」が置けるスペースを作るなど、コミュニティづくりへの配慮も細やかだ。また、各居室には立ち寄って話ができる和室や仏壇用のスペースも確保。数々の心遣いに、見学者から「住む人にやさしい住宅だね」と感嘆の声があがった。

上野秀雄さん(66)、広子さん

(64)夫妻は、87歳になる秀雄さんの母と3人で、最上階の6階に住む予定だという。「やっぱり海が見えるとほっとしますね。屋上に避難スペースがあつて、何かのときはそこへ上がれるのも安心です。震災から5年、これからようやく新しい暮らしが始まる気がします」と笑顔を見せた。

2月から引き渡しが始まった宅地では、既に地縄が張られた区画も目立つ。三枚堂正文さん(47)の宅地は、まちびらき会場テントのすぐ前だ。

「釜石の仮設住宅に住みながら工事の進捗を待っていたので、一緒に内覧会が行われた災害公営住宅は落ち着いた外観



に住む母もすごく喜んでいきます。今日の式典では、以前隣に住んでいた人にも会えたり、5年ぶりに神楽や虎舞を見て、思わずうっとうと来ました

ね。早くまちの形になって、前と同じように神楽や神輿が練り歩くのを見たいです」と、喜びに満ちた顔で答えてくれた。

## 歴史と伝統を伝えるまちに

現在、大槌町は復興へ向けての工事の真っただ中にある。中心市街地である町方地区は14・5メートルの防潮堤を築き、市街地を震災前の約半分の30ヘクタールに縮小して平均2・2メートルをかさ上げ。平成29年度にかけてコンパクトで暮らしやすいまちへと生まれ変わる予定だ。

津波で町役場が被災し、町長以下町役場職員40人を失った大槌町で、復興計画策定の段階から支援に入ったのがURだ。大槌復興支援事務所の矢島龍太所長は語る。

「いちばん苦労したのは、盛り土用の土を確保することです。全体で東京ドーム1杯分の土が必要だったのですが、あいにくこの町には切り崩す山などがなかったんですね。隣の山田町や三陸沿岸道路のトンネル工事で出た土を運び、何とか調達して、約束したスケジュールドおりに進められる目途がつ

いた時は、本当にほっとしました」湧水が多い地区だけに、全体で70か所近くある井戸を埋め、沈下分を見込んで2〜3か月の試験盛り土の後に本格工事に入るのも、この地区独特だったという。そうした時間的ロスも、URはCM方式という工事形態でカバー。設計、施工、マネージメントなど、本来は段階的に進める工事を大きくりして一括発注することで通常より速いスピードで事業を進めている。

神戸市からの応援で赴任している、大槌町復興局都市整備課の青木利博課長は、「URさんには阪神淡路大震災のときも助けていただきましたが、災害復興支援だけでなく大規模ニュータウン建設などのまちづくり経験も豊富。とても頼もしい助っ人です」と語る。

大槌町では、「海の見える美しいまち」の将来像のもと、住民主体のまちづくりが進められてきた。町とURは、パートナーシップをとりながら、各種ワークショップを開催。「道幅が広いと、道路の両側での一体感がなくなる」と

の要望で県道幅を18メートルから16メートルに縮小するなど、より住みやすいまちづくりを目指している。

前述の青木課長は語る。

「大槌には、城跡などの文化財や、集落や地区ごとに伝わる虎舞や神楽など、すばらしい文化が残っている。そうした歴史と伝統を大切にしたいまちになってほしい、必ずなる、と信じています」新しいまちには、住民の要望で大槌のシンボルでもある湧水の一部を埋めずに残し、豊かな湧水をたたえた公園をつくる予定とか。尊い歴史と伝統を慈しみながら、大槌町は蘇りのさなかにある。